

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02516

研究課題名（和文）ウォートンの創作と建築の連携 空間の創出から文学的想像力へ

研究課題名（英文）The Synergetic Influence of Edith Wharton's Writing and Domestic Architecture: Architectural Imagination and Literary Imagination

研究代表者

石塚 則子 (ISHIZUKA, Noriko)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：80257790

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀世紀転換期に活躍したイーディス・ウォートンの場合、西洋建築への造詣や自身の邸宅建築にかかわった経験が、作家としての自己形成に大きく寄与した。本研究では、ウォートン自身の私的営みとしてではなく、19世紀前半からの近代化に伴う室内装飾や住宅建築の変遷、さらに男女の領域分離主義やドメスティシティ言説の背景を考察しながら、女性空間創出のエンパワーメントの文脈で建築と創作の連携を考察した。さらに、アメリカにおける住居観を敷衍するため、アンテベラム期のアンドリュー・ジャクソン・ダウニングやキャサリン・ピーチャーの論考を考察し、住居におけるジェンダー空間構築の軌跡を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イーディス・ウォートンの空間造形の営みと作家としての自己形成の過程を、単なる私的営みとしてその軌跡を考察するのではなく、19世紀前半から喧伝されるドメスティシティ言説、男女の領域分離言説、ヴィクトリア朝文化から新古典主義への建築様式の変遷などを敷衍しつつ、女性空間創出のエンパワーメントの文脈で再定置することが、本研究の独創的な点である。こうしたウォートンの建築的想像力がどのように文学テクストに投影され、また20世紀転換期においてジャンル・ジェンダー・国境を越境しながら、女性が公的空間を創造し社会進出を遂げていくプロセスと連動するのか、学際的なアプローチで文学研究に新たな展開を提起した。

研究成果の概要（英文）：This research project aims at exploring the synergetic influence of Edith Wharton's writing and domestic architecture. Through her interest in European architecture and her experience of designing her own houses, Edith Wharton (1862-1937) cultivated architectural imagination, which later developed into literary and artistic maturity. This project examined her own personal and professional independence in a broader context, tracing the cultural and historical backgrounds of domesticity, gender spaces, "separate spheres," the development of theories on dwelling space since those of Andrew Jackson Downing and Catharine Beecher. Her architectural imagination provided her with rich material for her fictional world and empowered her to create both private and public spaces for women at the turn of the 20th century.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：イーディス・ウォートン ドメスティシティ ジェンダー・スペース 室内装飾 キャサリン・ピーチャー
アンドリュー・ジャクソン・ダウニング 住宅建築 男女の領域分離

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、イーディス・ウォートンやヘンリー・ジェイムズ、スコット・フィッツジェラルドを中心に、20世紀転換期のアメリカ文学テキストを、消費文化、モダニティ、異文化間移動のダイナミズムなどの観点から研究してきた。特にイーディス・ウォートンについては、1870年代のニューヨーク上流社会に育ちながら、近代化が進む大西洋兩岸の文化を移動しながら獲得した、ヨーロッパとアメリカに対する複眼的な視座がどのようにテキストに反映されているかについて検証してきた。本研究においては、作家としての萌芽期から20世紀初頭の時期を取り上げ、大きな文化変動の文脈の中で、建築との関係性からウォートンのテキストや活動を再評価した。

ヴィクトリア朝文化の伝統や秩序が瓦解し、流動化・異種混淆が進む移行期に、アメリカとヨーロッパ両方の文化的規範の緊張関係の中で創作を続けたウォートンは、「安住できる始原的空間」を維持することができず、その自己定位不安を自らの創作空間づくりの探求へと昇華していく。ウォートンの作家としての成長過程に関する従来の研究の多くは、創作へと駆り立てた主要な動機を、母親や夫との心理的葛藤にあると論じた。本研究代表者はジェンダー化された屋内空間や住宅建築に対する知見から得たウォートンの建築的想像力に着目し、そこからウォートンは文学的想像力を陶冶したと考えたのが、本研究の出発点であった。

さらに、ウォートンは創作活動だけではなく、20世紀初頭にヨーロッパに居を移してからは、第一次世界大戦中の慈善活動、特に戦争避難民や女性が働く場を創出する。それは、同時期に、例えばシャーロット・パーキンス・ギルマンの女性の社会進出を可能にする住居観やジェーン・アダムズのセツルメント・ハウスなど、同時代の女性たちの私的/公的空間創出と社会活動を通して、19世紀に「家庭の天使」としてドメスティックな空間に閉じ込められていた女性たちの社会参与の流れと共振するものと考えられる。創作と建築は、一見全く違う創造的営為であるが、ウォートンの場合、それぞれに対する関心と熟練が双方にいい刺激となり、作家としての自己意識や才幹を陶冶したのである。それは個人主義が発展していく時期と重なるのであった。

本研究代表者は2012年関西アメリカ文学会の招待シンポジウムにおいて、「漂流する女性」「モダニティ」「文化移動」をテーマに、流動化する近代社会におけるウォートンのまなざしと、精神的な空間としての「家」の喪失について発表し、論文「「モダンな子どもたち」と1920年代—Edith Whartonの*The Children*」をまとめた。2013年京都大学大学院コロンビアでの招待講演「ウォートン作品における「家」とジェンダー・ポリティックス」では、ウォートン自身の人生と作品の系譜の両面から、「家」の記号的・文化的意味や、社会と女性の私的空間の関係性を考察した。その一部、特にウォートンの幼少時代の住居や作家としての萌芽期に手掛けたいくつかの邸宅と、作家としての自己形成との関わりを論文「ウォートンの著述業と建築 - 作家としての自己形成と家づくり」(2014年11月)の中で論じた。その検証過程で、ウォートンが「初めての本当の家」と称し、個人の人生、さらに作家としての人生の転換点となった邸宅「マウント」を取り上げ、建築家オグデン・コッドマンとの共働作業や最初の出版物となった『家の装飾』で醸成された「ドメスティック・アーキテクチャー」に関する理論に着目し考察したことが、本研究の企図につながった。

「マウント」建築については、ウォートンの私的な人生との関わり、具体的には結婚と離婚や母親からの自立が批評的関心を今まで集めてきたが、世紀転換期のナショナリズムの高揚と共振する、アメリカの建築の発展や都市景観への意識の高まり、ニューポートの「泥

棒貴族」と称された新興成金の大邸宅、さらに女性の専門職への進出、公的・私的空間への意識の高まりなど、学際的な視点から再考することで、20世紀転換期アメリカの文学研究だけではなく文化・歴史・芸術研究に本研究は資することになると考えた。また「マウント」建設の際、ウォートンは、姪のピアトリックス・ジョーンズ・ファーランドの協力も得た。ピアトリックス・ジョーンズは、のちに全米の上流階級の住宅庭園の設計から大学などのキャンパスや公共施設の公園や植物園の設計に携わり、アメリカの女性景観設計家のパイオニアとなった。ウォートン、ファーランドともに、パリのエコール・デ・ボザールで教育を受けた新進気鋭の建築家たちとの交流が確認されている。また「マウント」を手放した後、パリを本拠として、創作活動の傍ら第一次世界大戦中に様々な慈善活動や社会活動で新たな「場」を構築した。こうしたウォートンの一連の建築とのかかわりを検証することで、ウォートン研究に新しい視座を提起できると考えたのである。

本研究代表者は、2015年9月より米国インディアナ州インディアナ大学ブルーミントン校で客員研究員として研究活動を行い、その間、全米各地のウォートン関係の資料収集や世紀転換期の建築物を視察する機会を得た。またウォートン研究家であり、またモダニズムの理論に造詣が深いインディアナ大学 Jennifer L. Fleissner 教授やイリノイ大学の Dale Bauer 教授と交流を続け、有益な助言を得ている。またイーディス・ウォートン財団が管理する邸宅「マウント」(マサチューセッツ州レノックス)を2015年10月に訪問し、ウォートンが所蔵した本を管理する司書 Nynke Dorhout 氏と、ウォートンの所蔵本を閲覧しながら意見交換をした。こうした研究協力者を得ることで、本研究に取り組む環境を整えることができた。

2. 研究の目的

20世紀転換期に女性作家として商業的成功を収めたイーディス・ウォートンの創作の発展の背景に、建築がどのように関わったかを検証することが本研究の中心主題であった。ウォートン作品においては「家」や「室内装飾」が私的空間の隠喩として機能するだけでなく、建築に対するウォートン自身の審美眼や初めての出版物『家の装飾』とそれを具現化した屋敷「マウント」の建築など、「建築的想像力」が作家としての自己形成に大きく寄与した。ウォートンの空間造形の営みと作家としての自己形成の過程を、単なる私的営みとしてその軌跡を検証するのではなく、19世紀前半から喧伝されるドメスティシティ言説、ヴィクトリア朝文化から新古典主義への建築様式の変遷、都市美運動や建築の専門化など、アメリカの歴史・文化研究やモダニティ研究の一つとして女性空間創出のエンパワーメントの文脈で再定置することを目的とした。

本研究の独創性は、一つのモダニティ研究として、ドメスティックな空間に閉じ込められていた女性が、ジャンル・ジェンダー・国境を越境しながら、建築を通して公的空間を創造し社会進出を遂げていくプロセスを検証する点にある。女性たちは流動化する社会、人とモノの交流が盛んになる20世紀転換期に、一つのジャンルにこだわることなく社会の様々な位相でのボーダーを越境していった。ウォートンの最初の出版物が『家の装飾』であったことや、男女を超えたコスモポリタンな友人たちとのネットワークを通して、複眼的思考や価値観を錬成していったことがその例であろう。こうした20世紀転換期の時代性と、さらに空間創出を介しての女性のエンパワーメントについて明らかにすることが本研究の意義であった。本研究の当初の目的では、以上のようにウォートンが作家として活躍する20世紀転換期を射程にしていたが、屋内のジェンダー空間や個人主義が台頭する以前の男女の領

域分離やドメスティシティ言説についての歴史的考察が、本研究にさらなる広がりとなし、確かな学問的基盤を付与すると確信し、当初設定した研究領域を時代的に1840年代までに拡大した。近代化が急速に高まり、アメリカの国家像が構築されるアンテベラム期における、住宅建築や家の住居観について、アンドリュー・ジャクソン・ダウニングとキャサリン・ピーチャーを取り上げ、世紀転換期の女性の主体性の萌芽や社会活動の背景を探った。

その結果以下の4点を明らかにすることを本研究の目的とし、研究期間を1年延長し、4カ年とした。ウォートンの創作と建築の関連性 20世紀転換期の建築様式の変遷 新進建築家の活躍と都市景観の変化、ピアトリックス・ジョーンズ・ファーランドの業績、ニューポートを中心とする大邸宅の建築と顕示的消費 文化・ジェンダー・ジャンルを越えた女性たちの空間創出とエンパワーメント (研究期間の2年目に、初動の研究領域を広げ) 1840年代のアメリカの国家像構築とともに発展する住居観と男女の領域分離について以上の主題の考察を本研究の目的とした。

3. 研究の方法

以上の4点を研究主題の軸としたため、資料と文献収集、建築物の現地調査やそれを管理する専門家の意見交換が中心となった。先行研究や関連分野の資料収集はインディアナ大学の各図書館(リリー稀覯本図書館、芸術学部図書館など)を中心に、同志社大学の各書庫に所蔵されている文献やデータベースや図書館の文献複写サービスなどを利用した。これらの資料を収集し、学会発表や論文発表によって、研究成果をまとめた。

(1) 本研究のための現地調査については、以下のとおりである。

インディアナ大学リリー稀覯本図書館所蔵のウォートンの写真や一次文献

ウォートンの邸宅「マウント」(マサチューセッツ州レノックス)とその図書館(司書であるNynke Dorhout氏によるウォートンの書斎や所蔵図書の解説)

エミリー・ディキンソン・ミュージアムとディキンソン家(マサチューセッツ州アマス ト)

ロードアイランド州ニューポートの邸宅群(特にヴァンダービルドの「プレーカース」)とウォートンの新婚時代の「ランズ・エンド」、ニューポート歴史資料館(ウォートンが住んでいた1890年当時のニューポートの地図の収集)

ハリエット・ピーチャー・ストウ・センターとストウの家(コネチカット州ハートフォード)

マーク・トウェイン・ミュージアムとトウェインの家(コネチカット州ハートフォード)

ウォートンの姪が設計したダンバートン・オークス(ワシントンD.C.)とイエール大学構内にある庭園(コネチカット州ニューヘヴン)

イタリア・ベニスでの資料収集

ニューヨーク市にあるウォートンの生家やアパートの跡地、ニューヨーク市立博物館にある「金メッキ時代のセクション」、ニューヨーク市モルガン・ライブラリー

それぞれの現地調査で、司書や学芸員の協力を得て、資料収集(写真や書簡などの第1次資料や第2次資料)や有益な情報を得ることができた。

(2) ウォートンやジェイムズ研究家との意見交換のため、以下の国際学会に参加した

MLA(Modern Language Association)学会(2016年1月テキサス州オースティン)

イーディス・ウォートン国際学会(2016年7月 ワシントンD.C.)、ALA(American

Literature Association)学会(2016年7月 カリフォルニア州サンフランシスコ)
第7回国際ヘンリー・ジェームズ学会(2017年7月韓国ソウル市延世大学、口頭発表)
第8回国際ヘンリー・ジェームズ学会(2019年7月イタリアトリエステ大学)
また日本国内での学会において口頭発表に対するフィードバックを得ることで、論考を精緻化した。

以上のような現地調査、国内外の学界での意見交換、文献資料や先行研究調査により、以下のような研究成果を得た。

4. 研究成果

当初の研究目的は、イーディス・ウォートンの建築と創作の連携を軸に、ジェンダー・国家・文化のボーダーが流動化する20世紀転換期における、建築と女性(私的/公的)空間の創出を一つのモダニズム研究としてまとめることであったが、ジェンダーと建築の観点から研究を進めていくうちに1840年代からの住宅建築と個人主義の台頭やジェンダー・スペースについての考察が、本研究の学問的基礎として必要であると判断した。また2016年8月までのインディアナ大学で研究滞在中の文献収集と、その後の海外での資料収集により、ウォートンの建築と文学的想像力の連携を中心にしながらも、1840年代から20世紀初頭まで、つまり男女の領域分離主義から個人主義が台頭し、女性の社会進出が進み公的空間の創出にかかわるようになる流れの中で、建築と文学的想像力の関係性の論考をまとめ、いずれは一冊の著書にまとめる展望を得られたことが大きな成果であった。このように当初の研究計画を拡大修正したため、研究期間を1年延長し、4年間の研究期間内には、以下の主題についての論考を学会で発表し、論文化することができた。

- (1) アンテベラム期におけるアメリカのナショナリズムを背景にした住居観の考察
- (2) 男女の領域分離やドメスティシティ言説構築の背景
- (3) 個人主義の台頭を背景にしたイーディス・ウォートンの住居観
- (4) ウォートンの文学テキストにおける登場人物の内面性(interiority)と室内空間の関係性
- (5) イーディス・ウォートンの建築的想像力と文学的想像力の連携

(1)については、南北戦争以前のアメリカ社会において、ナショナリズム高揚のなかで、男女の領域分離と密接にかかわるドメスティシティ言説がどのように構築されたかを、アンドリュー・ジャクソン・ダウニングとキャサリン・ビーチャーそれぞれの住居観を比較することで考察した。またダウニングの住居観については、同時代の作家キャサリン・マリア・セジウィックの『ホーム』を取り上げ、文学テキストにどのように当時のドメスティシティ言説が投影されていたかを検証した。

(2)については、近代化にともなう男女の領域分離と女子教育の発展を背景に、家事労働の効率化についてのマニュアル本を出版したキャサリン・ビーチャーの『ドメスティック・エコノミー論』を取り上げ、保守的なジェンダー理論と評価されてきたビーチャーの論考における革新性を考察した。特に本研究の主題との関係で、ビーチャーの家庭内のジェンダー空間のあり方や個人主義やプライバシーの萌芽について論じた。

(3)(4)については、ウォートンの最初の刊行図書である『家の装飾』におけるウォートンの住居論を、ジェンダー空間と住宅における個人主義の担保に焦点をあてて論じた。

(4)(5)ウォートンの『家の装飾』に反映された住居論、特に個人と住空間の関係性や規範が、文学テキストにどのように反映されているかを考察した。さらに、ウォートンの代表作を取り上げ、ジェンダー空間の点から新しい読みを提起する予定である。

さらに、研究期間中に集めた文献資料や歴史的文化的資料をもとに、ヨーロッパ移住後の建築と創作の関係性、第一次世界大戦におけるウォートンの社会活動(公的空間の創出)、ウォートンの姪であるピアトリックス・ジョーンズ・ファランドについての紹介など、次の研究プロジェクトの展望を得ることができた。本研究期間中に得た、研究協力者やアメリカの研究機関とのつながりを維持しつつ、さらに研究を進化させ、著書の形にまとめたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 石塚 則子	4. 巻 54
2. 論文標題 活字メディアとしての『ドメスティック・エコノミー論』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『アメリカ研究』（巻憑論文）	6. 最初と最後の頁 45 - 66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石塚則子	4. 巻 100号
2. 論文標題 「イーディス・ウォートンの「自分だけの部屋」 『家の装飾』における個の空間」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『同志社大学英語英文学研究』	6. 最初と最後の頁 135 - 163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Noriko Ishizuka	4. 巻 Proceedings
2. 論文標題 "Cosmopolitan or 'Home' -less?: Henry James's Transcultural and Architectural Imagination"	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Proceedings of The 7th International Conference of the Henry James Society "Jamesian Cultural Anxiety in the East and in the West"	6. 最初と最後の頁 219-225
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 石塚 則子	4. 巻 No. 53
2. 論文標題 アンテベラム期の「リパブリカン・ホーム」 住宅建築の発展とドメスティシティの構築	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『同志社アメリカ研究』	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Noriko ISHIZUKA
2. 発表標題 The Affective Qualities of Domestic Spaces in Edith Wharton's <i>The Age of Innocence</i>
3. 学会等名 The Edith Wharton's New York 2020 Conference (sponsored by the Edith Wharton Society) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石塚則子
2. 発表標題 「イーディス・ウォートンとドメスティック・スペース The Decoration of Housesにおける住居論」
3. 学会等名 第35回日本アメリカ文学会中部支部大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石塚 則子
2. 発表標題 “Cosmopolitan or ‘Home’ -less?: Henry James's Transcultural and Architectural Imagination”
3. 学会等名 第7回ヘンリー・ジェームズ国際学会 “Jamesian Cultural Anxiety in the East and in the West” (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石塚 則子
2. 発表標題 「アンテベラム期のふたつのドメスティシティ論 Andrew Jackson DowningとCatharine Beecherの住居観」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会関西支部例会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 里見繁美、中村善雄、難波江仁美、行方昭夫、北原妙子、中井誠一、名本達也、中川優子、水野尚之、齊藤園子、松井一馬、畑江里美、砂川典子、石塚則子、町田みどり、松浦恵美、堤千佳子、志水智子、海老根静江、福田敬子、別府恵子	4. 発行年 2016年
2. 出版社 英宝社	5. 総ページ数 411(167-185)
3. 書名 ヘンリー・ジェイムズ、いま 歿後百年記念論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----